

景観フォーラム

巻頭言

あけましておめでとうございます。今年の冬はきわめて寒い季節となりました。特に日本海側と北海道の大雪には例年のない冬景色となっております。夏は台風と豪雨そして冬は大寒波と豪雪というように日本という国土は大自然がもたらす激しい災害の多い地域となってしまいました。そのような国にとって景観を論じる価値はあるのでしょうか。

政治と景観。この二つは全く関係のないものとして思われがちではありますが、どうでしょうか。例えば、日本の景観の特徴になってしまっている“電線電柱”の在り方を考えてみましょう。もう20年以上前の大災害になりますが、「阪神淡路大震災」のとき指摘されたのですが、倒れた電線電柱が被災した人々の救済に大変な邪魔ものになり、そのことによって多くの人命が失われました。その時点では電線電柱の地中化が真剣に議論されましたが、豈図らんや、復興された街並みには電線電柱がもとの景観の中にしっかりと存在するではありませんか。そして、3・11と言われる7年ほど前の“東日本大震災”でも電線電柱が押し寄せる津波と一緒に大変危険なものとして証明されました。もともと地中化されていた電線類は被害が少なく復興も早かったそうです。復興に当たって、当初のまちづくりにはその電線電柱の地中化が議論されているはずなのに、またそぞろ電線電柱があちこちに現れ始めました。平常時にはきれいな風景を汚し、緊急時には住民の凶器と化すこの電線電柱は日本の政治が改善しない限り存在し続けるのでしょうか。

この現象一つとっても、政治と景観は密接に関係性を持ち、景観はまさに日本の現代政治そのものの反映であるように感じられます。議論されたのに現実の施策に結び付かない。本来のデモクラシーが機能しているとするなら、時間をかけた話し合いは生活を改善して行く働きがあるのに、日本では熱心な議論や話し合いは生活の改善に反映されないのが現実のようです。まさに現代日本における政治そのものではないでしょうか。

さて、今年度の日本景観フォーラムでは、そのような現況を打開すべく、日本の景観について密度の高い議論に基づき、“悪い景観”を発表していきたいと考えております。会員の皆さん。積極的なご参加のほどをお願い申し上げます。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2017年度(平成29年度)年間スケジュール>

*2017年度とは2017年4月1日⇒2018年3月31日のことです。

2017年

4月25日(火) 第1回理事会・総会 於JICA研究所

5月27日(水) 景観まちあるき：浅草界限(台東区)

7月10日(月) 景観研究会*：研究会の具体的内容について検討 於JICA研究所

8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?

11月9日(木) 第2回理事会 於JICA研究所603号室

12月14日(木) 忘年会(神楽坂のイタリアンレストランで実施)

2018年

1月26日(金) 景観研究会：景観と観光をテーマに悪い景観について話し合う JICA研究所

2月14日(水) 景観研究会：1月の景観研究会の継続 JICA研究所

3月24日(土) 景観まちあるき(1月の景観研究会で決定)

*景観研究会：このたび景観セミナーを景観研究会と名称を改め、広く一般に参加者を募ることより、会員の皆様の景観研究を主体にした10人程度の研究会にしようかと考えました。外部からの参加者も自由に参加は出来ますが、講演形式よりも講師を囲み自由に議論できる形態にしたいと思っております。

歩いて、歩いて

NPO法人日本景観フォーラム 会員
豊村泰彦

これまでずっと「景観」のことが気になって仕方がありませんでした。というのは、街のいたるところに張り巡らされた電線や電柱、むき出しになったエアコンの出外機、色、形状とも無秩序に掲げられる看板やサインなど、悪いことばかり見えてしまって、景観のことを考えるときに、楽しいことがあまりないのです。団体の活動ですと、いい景観ばかりでなく、悪い景観を判定して、対象をどう改善していくか考えることも大事ですが、これは国の政治とか民族的な性格とか、電力会社とか、私たちの手の届かないことばかり浮かんで、いい景観を希求する姿勢がかえって、自分の気分を悪くすることにつながっているように思います

そこで、最近は景観に対する見方として、もっと楽天的、情緒的であっていいかな。そして、ときには脳天気であってもいいかな、という気持ちになってきました。つまり、景観をいい景観、悪い景観という指標でとらえるのではなく、人が関わった様々な手間とか、街の人の涙ぐましい努力とか、苦勞して絞じだしたわりには斬新とは言えないアイデアとか、主に人と景観とのかかわりにフォーカスを合わせて、客観的な判定を取ってしないという思い切った景観アプローチもよいのではないかと思うのです。

国道だとか、車がビュンビュン通る道路の歩道を歩いても、何ら変わったものが見つかるわけではありません。しかし、こうしたパブリック空間には、人を特定の商業空間に引き入れる商売根性が火花を散らしています。大看板であれ、デカ文字であれ、目立つ色であり、奇異な形状であれ、これは車からメッセージを見つけようための商売装置です。視点を変えるとこれも一つの景観です。「商売景観」否「商業景観」と言ってよいかもかもしれません。

一方、車が比較的通らない、あるいは歩行者優先道路に面した商店街などでは同じ商業景観でも人を惹きつける創意工夫が必要で、人の知恵が生かされた建物のデザインやデザインが随所に生かされています。そこには人が気持ちいいと感じる景観は最大限尊重されているわけです。たとえ電柱がまだ撤去されていなくても、そのほかの部分で地域性とか、歴史性とか、友愛性を感じるものになっていたりします。最近では空き家になった古民家を店舗やカフェに改装しているところもありますが、これなどは落ち着きとか親和性が強調され、お客様にもっと接近し、コミュニケーションを深めていこうという姿勢がにじみ出ています。景観を重視して取り組む姿勢の現れだと思えます。古民家といってもせいぜい築50年程度のそれほど古いものではないものも多く、伝統建築などとは程遠いかもしれません。でもそこにまちづくりをしている住民たちの心息を感じてしまって、つい店の方と無駄話をして、余計に物を買ってしまうなんていうこともあります。そうした商売根性は、まち全体の景観を考え、実践した人の力も入っているんだと納得し、清々しい気持ちになっています。つまり、景観の見方というのは、そんな能天気さもあってよいかなと思うのです。



<LFJブックレビュー56>

『都市美—都市景観施策の源流とその展開』西村幸夫編 著

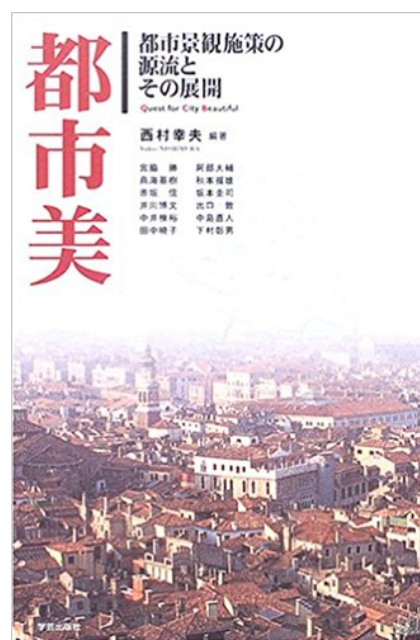
学芸出版社 2005年刊

“都市美”という言葉に若干違和感を感じるのは私のみであろうか。というのは、都市が発するであろう美しさ、都市そのものが持つ美というものに何となく奇妙な感覚に陥ってしまうのである。確かにヨーロッパの諸都市が発する荘厳な美しさ、都市が発しているであろう神々しさというものは世界の都市景観のTV番組をみれば理解できる。ところが、日本という国土に住んでいると、例えば古都である京都の街並みからは都市美という言葉とは異なる何かを感じてしまうのである。また、首都東京の主要都市である池袋、新宿、渋谷、四谷、有楽町、霞が関でも都市美という感覚に陥る人はいないだろうと察する。という、この都市美という概念はヨーロッパ発の未だ翻訳不可能な様態を示している概念ではないかと考えざるを得ないのである。

この『都市美』では、この問題を「各人がそれぞれに自分なりの“美しい都市”像を持つことはいっこうに構わない」とするが、「ここで問おうとしているのは個々人の原風景ではない。“美しい都市”としてそれぞれが共通して納得できる都市像がどのようにして成立可能なのか」そして「そこでの論理は？・・・通底する時代精神とは？・・・個人的な“美”がいかんして公共性を獲得しうるか？その論拠や方法論は？・・・それらが一般社会に行政施策としてどのように受容されていったのか？」として欧米諸国の歴史と現状を考察しているのが本書である。

先ず第1章では「イタリアの都市美ルネサンス—変わらない古典的美意識」とし、都市美の発祥を紹介する。第2章ではその伝搬先として「フランスの“都市の美化”—理念の萌芽と発展」その施策として第3章「フランスの都市美施策—その誕生と昇華」これらの運動が第4章「ドイツの国土美化と郷土保護思想—美を与えることと美を見いだすこと」そして第5章「ドイツ都市条例—建築外観規制による都市景観の形成」へと発展する。以上の流れとは若干異なり島国としての独自の美意識を持つイギリスでは第6章「イギリス田園都市の都市美思想とアメニティ—美と都市計画制度」へと移行して、第7章「ベルギーの都市美運動」第8章「スペインの都市美思潮とバルセロナでの展開」となり、これが新大陸に移り第9、10、11章ではアメリカ合衆国のシティ・ビューティフル運動から建築条例の起源と都市美をへてニューアーバニズムが生まれるまでを論ずる。そして第12章「日本の都市美運動—市民社会への精神史」第13章「日本における風景認識の変遷」を考察して、最後に第14章「都市美創出の道筋をたどる」では、都市美という概念の総括として「近代民主主義国家においては“美”の達成に公共性がある」ことを強調し、「終戦直後の混乱期から高度成長期にかけて、日本人には自分たちの住む家やまちの外部空間が公共的なものであるという観念が欠落してしまった」と指摘し、「“都市美”が資産価値を増進させる」ことを提示する。

しかし、新たな都市美運動をしようと思うなら、儲かるだけでは根付かないのではないか。日本人が富士山を愛するような日本人の美の原点を模索するしかないように思われる。（斉藤全彦）



天地玄黄

⑩ 「2020年東京オリンピック開催に向けて東京の景観はどう変化していくのか？」

2020年東京オリンピックが決まりました。東京オリンピック開催に向けて、東京の景観、特に広告のある風景、広告景観はこれからどのように変わっていくのでしょうか。

まず、はじめに、景観についてですが、景観には、工学的な景観と地理学的な景観という大きく分けると2つのアプローチがあります。

工学的景観とは、景観を新たに創造するというように、景観を操作的に扱い、視覚的側面から景観空間の構造を分析し、美しい景観の構成要素を提示するものと言われています。

一方、地理学的景観とは、景観を地域から解明しようとするもので、美の概念を持ち込まず文化的アプローチをするものと言われています。

日本では、おもに工学的景観の視点で、調和という概念をベースに「美しい」「醜い」で良好な景観が議論されています。

屋外広告物の規制では「良い景観」とは、すなわち周辺環境との「調和」を保つことと同義に扱われています。そして調和を乱す最たるものが看板である、という論調が後を絶ちません。それは、ヨーロッパの整然とした街並みこそが最高であると一方的に定義づけることで、その対局にある日本の東京の混沌とした景観を醜いとする1つの図式です。

東京の混乱した街並みは、戦後の焼野原から驚くべきスピードで復興を遂げてきた日本の歴史の縮図でもあり、いわば活力の結集ともいえます。こうした戦後に築かれた文化に対し、国土交通省の「美しい国づくり政策大綱」（国土交通省2003）は、社会資本は量的に充足されたが、電線、ブロック塀、不揃いなビル、看板、標識が雑然と立ち並ぶ様子は「美しさとはほど遠い風景」と評し、それを改善するために行政の方向を美しい国づくりと定め、自然との調和を図りつつ整備する方針だとしました。

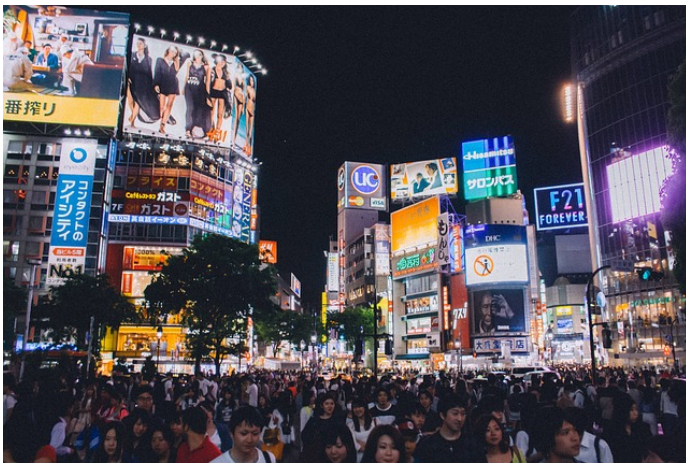
この「美しい国づくり政策大綱」をベースに2004年景観法が制定されました。この景観法の成立を受けて屋外広告物法も改正され、美観風致の維持から良好な景観の創造という概念が加わりました。

つまり「美しい」「醜い」という相対的な価値基準を、絶対的な基準のように規定しようとする美のシナリオが日本全国、都市景観から自然景観まで一律にできてしまったということです。

当然ながら、規定の詳細を条例化するよう任された自治体としても、その意図を汲まざるを得ません。これはどういうことかと言うと、少し極端に言えば、エネルギーで活力のある猥雑でごちゃごちゃした都市景観は醜いという図式です。要するに価値基準として、猥雑さが魅力的であっても美

しくないものは評価できなくなってしまったのです。実はこのことは案外大きな問題であるとボクは認識しています。

「現代の都市はカオスの美以外を表現できない」と一貫して提起してきたのは、建築家の篠原一男さんです。1981年「プログレッシヴ・アナークィ」という言葉を用いて、「混乱」を単に否定するのではなく「ここまで到達した〈文化〉として位置づけています。



ソース：「看板キッド、高橋芳文のブログ」



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan